

第二十七回

光照寺報恩講 法話

『悲しみからの仏教入門』

田代俊孝先生 講述

(同朋大学大学院教授、行順寺住職)

〈開式挨拶 三輪民子護持会副会長〉

今日は親鸞聖人の御恩徳に報謝し、いのちの道理を深く尋ねる一年の内でも大切な仏事であり、真宗門徒として必ず勤める法要、報恩講をご一緒に勤めさせて頂きますこと、心よりお慶び申し上げます。ありがとうございます。

〈光照寺住職 挨拶〉

皆様ようこそご参詣くださいました。先生におかれましては光照寺報恩講にご出講頂きましてありがとうございます。田代先生のご紹介をさせていただきます。皆様へのご案内には田代先生のご紹介が書いてありますが、私なりに田代先生のご紹介をしたいと思っております。

副住職が同朋大学で学ばせて頂き、そこで田代先生の教えを受けてこのようなご縁を頂いたことはまことにありがたいことだと思っております。私がこうして光照寺という新しいお寺を建て、報恩講二十七回目。本当に浄土真宗の七百五十年の歴史ですね、産声を上げてここにいる恵蓮ちゃんがいま九月との事ですが、そのようなお寺に喩えても宜しいかと思っております。しかし、もう私も後期高齢者の七十五歳でございますから、いつ死んでもよい今を生きております。いつまで生きてよい今というところで、真宗に遇わせて頂いたご恩徳をしっかりと命のある限り大事にしたいと思つて、歳に負けてはなるものかと、ご恩徳に応えるにはまだまだ足りない、と、いつも阿弥陀様にも南の聖地の親鸞聖人にもいつも怒られて、もっとしっかりと恩徳讃で歌うように身を粉にしても骨を砕きてもやっているかと御叱りを受けているような思いでございます。まことに恥ずかしいところに今歩ませて頂いております。次は副住職が第二代目として光照寺を継いでいける形で候補衆徒としてお届けをしております。いつ死んでもいいという準備は出来ており

ますが、まだまだだというのがここに立って田代先生のご紹介をしている分けでございます。

田代先生はビハーラ医療団の代表をお勤めでおられます。前回は田畑先生がビハーラというなかに浄土真宗に出会い、その教えに頂いた身から医療のことも含めてお話下さったのが昨年の報恩講でございました。一昨年の報恩講は同じくお医者さんでやはりビハーラ活動されている志慶眞先生でございました。その代表を務めるのが田代先生です。代表として束ねていらっしゃるわけです。まことに深いご縁だと思ふ分けであります。そのような中で今日のお話が『悲しみからの仏教入門』ということですので。本当に身を正して聞かせて頂きたいと思つてのことでございます。

先生のご本が玄関フロアに置いております。ひとつはNHKラジオの「宗教の時間」という中で金光寿郎先生（元NHKチーフディレクター）、が色々な宗教者に話を聞かれるのですが、その方が聞き手で「宗教の時間」で田代先生がお話になつてゐる冊子、『人生の終末期をどう過ごすかービハーラ医療団の願いー』が置いてあります。それからNHKラジオ深夜便「こころの時代」でのお話の冊子、『生と死を考えるーラジオ深夜便ー』も最近出版されたので置いてあります。それから法蔵館から『親鸞思想の再発見』というご本が出版されたので置いてあります。田代先生は代々お寺の伝統のある中で住職もお勤めになつております。光照寺とは全く違います。伝統的なお寺で住職をされております。尚且つ、同朋大学の大学院の教授をされておられ、そし

てビハラの代表であります。当寺とは月とスツポンであるなあと思いながら、しかし、親鸞聖人の教えを頂く如来の御弟子として共にここに報恩講教団と云われる浄土真宗に聞かせて頂くとうと、ここにご挨拶としてこのような話をさせて頂いております。是非とも田代先生の願いのほどを『悲しみからの仏教入門』、常に初心を忘れず拝聴させて頂きたいと思うことでございます。また、本も是非お買い求めくださいますしてじっくりと一つ読んで頂きまして先生の願心、信心の程を読んでいただければ嬉しいと思います。先生どうぞ宜しくお願いいたします。

2017年 報恩講 田代俊孝先生 『悲しみからの仏教入門』

■「死そして生を考える研究会」とビハーラ運動

ご紹介いただきました同朋大学の田代でございます。私は同朋大学の教員でありまして、仏教ホスピスであるビハーラという活動を提唱して今も続けております。私は三十歳で同朋大学の教員になったのですが、大学の研究室に入りますと、一番若いものが研究室の雑務をしないとダメません。名古屋の東別院をお借りして実習をやったりします。そうしますと布団の手配だとか、食事の手配だとか、バスの手配だとかそういう雑務をずっとやっております。後から入ってくる先生が僕より年上の人だったものでしたからずっと下積みでございました。でも五年位下積みをやっている時に、私は自分なりに仏教に対する疑問をいただいております。それは仏教というのは大体お寺の中だけで、社会とあまり関わりを持たないものとなりました。ましてや研究となりますと文献研究主体なのです。いわゆるサンスクリット語の原典でどうなっているとか、あるいはパーリ語でどうなっているのか。あるいは教義構造がどうなっているのかという研究です。日本印度学仏教学会という大きな学会がありますが、その学会の発表論文を見ましても、文献が主体の研究なのです。ですから別に信心は関係ないのです。ですからキリスト教信仰をお

持ちの方でも日本印度学仏教学会の会員でございます。信仰は関係ないです。そこで仏教とはそういうことなのかということ、甚だ疑問を持っておりました。お寺というのは敷居の高い所でその中に閉じこもってしまつて社会といつこうに関わりを持たなくなつてしまつてゐる。今から三十年、四十年ほど前のことを皆さん思い出してください。社会ではぼちぼちと癌の患者さんが多くなつてきました。今はもつと多くなりましたが、当時は三人に一人位が癌で亡くなるのだと。あるいはエイズがアメリカでは蔓延してゐました。日本にもエイズが入つてきました。また、来るべき高齢化社会に向けてどうするのか。高齢化ということが云われ始めました。そういう中で社会では“いのち”が課題になつてくるわけです。ちょうど、脳死、臓器移植のことが問題になつた時代でございます。日本学術会議から云われまして、日本印度学仏教学会の中にも臓器移植問題の検討委員会が作られました。私も専門委員に入つたのですけれど、インド仏教を専門としてゐる先生たちと話していても、文献学的なことばかりおっしゃるのですから現実への対応になつていかないのです。特に国立大学の先生は宗教心抜きで文献の研究をやっておりますからいさうさうです。一方、私立大学の同朋大学とか、駒沢大学とか大正大学とか立正大学とかそういう宗学、いわゆるその宗派の学問をやつてゐる方の方が社会とつながりを持つてゐるよう感じました。ですから文献研究主体の仏教に対して非常に疑問を持つてゐました。あるいは閉鎖的で社会と関わりを持たないお寺の仏教のあり方に私なりに課題を持つておりました。それで研究

室へ次の先生が入ってきて雑務を渡すことが出来たのです。その時に、先ほど云ったように癌の患者さんが多くなり、癌の患者さんがどんな心持ちで死を迎えていくのだろうかと考えました。そこに仏教が必要なのではないかと考えました。それで癌の患者さん、癌の手術をなさった方、或いはお医者さん、看護師さん、或いはソーシャルワーカー、そういった方に呼びかけて発起人になって頂いて『死そして生を考える研究会』を一九八八年に作りました。

『死そして生を考える研究会』

大谷大学の大学院時代の同期に田宮仁さんという方がおりました。私は同朋大学へ来たのですが、私の一年後輩の田宮さんは京都の佛教大学の研究室に行かれました。彼のお兄さんは新潟の長岡西病院の理事長でした。仏教のホスピスをテーマにしたいと云われました。ホスピス。皆さんご存知ですよ。緩和医療、癌等の末期で余命六ヶ月、余命三ヶ月で積極的な医療はしない。要するに自然な感じで死を迎えたい。その場合にとことん延命するのです。たらスパゲティー症候群、マカロニ症候群と云われますように、チューブをいっばいつけて延命治療をするわけです。そんなに痛いのは嫌だ。痛みをとってもらって自然な形で死を迎えたい。そういうのを緩和医療といいます。痛みをコントロールする為にモルヒネを使いますが、中毒症状が出てきますの

で若干死期を早めてしまいます。

ホスピス QOL

長さよりも質、命の質をQOLといいますが、quality of life、QOL、質をとるか長さをとるかということが問題になります。その時に多くの人がもうそんな末期になって身体を痛みつけて痛い痛いと言っていると云ってやるよりも、最後まで痛みをコントロールしてもらって自然な形で死を迎えたいと考えます。それもキリスト教の方ではかつて中世に聖地エルサレムを開放する為に、ヨーロッパの国から十字軍を派遣しました。地中海の島々の教会の人達が傷ついた兵士達の看取りをしたのです。死の看取りを。それをホスピスと呼んだのです。やがて、十九世紀、二十世紀になりました。イギリスに病院に付属して終末期のケアをする施設ができました。西洋医療の場合、キリスト教と一体ですから、牧師さん、あるいは、シスターに心のケアをしてもらって死を迎えるのです。それをホスピスと云います。これは戦後、日本にも入ってきました。宗教者抜きのもの、緩和ケアと云っております。それで、キリスト教の立場で緩和ケアをするものをホスピスといえます。「聖路加病院のピースハウスホスピス」であるとか、浜松の「聖隷ホスピス」とか、映画になった郡山の山崎先生のホスピスなどがあります。そういうところはキリスト教の

チャプレン、シスターあるいは牧師さんがついて心のケアをします。それを仏教の立場でやろうということも田宮さんという方が私に云ってきたのです。ところが、ホスピスというのは本来キリスト教の言葉ですから、「仏教」という言葉つけたらおかしいのではないかと。それでビハラという言葉で云おうよと田宮さんがおっしゃったのです。そこで私の「死そして生を考える研究会」のまたの名を「ビハラ研究会」としました。

ビハラ Vihara

安息処 僧院 精舎

ビハラはサンスクリット語（梵語）です。（Vihara）安息処、安らかなところ、僧院、あるいは精舎、つまり、お寺という意味です。これを全国に広げようと田宮さんがおっしゃったのです。こういうことを始めたら社会の反響が物凄くあったのです。私がこの研究会を同朋大学で始めました。私のゼミの学生さんに手伝わってもらって、月一回、癌の患者さんとか、お医者さんとか、そういう人に死について話してもらいました。なぜ『死そして生を考える研究会』と死を前に云っているか後でおわかりいただけだと思います。当時、上智大学にアルフォンス・デーケンという先生がおられました。この人が『生と死を考える会』というネーミングにしております。

僕は『死そして生を考える研究会』。毎月さまざまな人達に死についてお話をして頂いたのです。そうしたら市民の人たちがどんどん研究会に参加しに来られるのです。多い時には六百人以上の人が会員になっていました。毎月の定例の研究会には二百人以上の人が来るわけです。そうなりますと、マスコミがどんどん紹介してくれます。私の研究室にテレビカメラが入ってそういうのを紹介するのは正に老いの問題、病の問題、死の問題なのです。こういうことに目を向けない仏教は何だろうか。お釈迦さんはなぜ出家をしたのかと。カピラ城の皇太子だったゴータマシッダールタが、ある時に東の門を出て行ったら年老いた老人に出会った。人はなぜ老いるのか。老いの苦しみをどう超えていったらいいのかという課題を持って帰ってきました。南の門を出て行ったら病の人に出会った。人はなぜ病むのか。その病の苦しみをどう超えていけばいいのか。西の門を出て行ったら葬式の列に出会った。死の苦しみを超えるのにどうしたらいいのか。生まれてきたがゆえに生ずる生老病死（四苦）を超えていくのにはどうしたらいいかを課題にして出家をしました。とするならば、まさに時代を越えてこれこそが現代の人達の最大の課題でもあります。これに目を背けて仏教と云えるのであろうかと。そこで、そういう実践的な形の仏教の学びを同朋大学から提唱していったのです。云ってみれば文献仏教に対する一つのアンチでございます。或いは閉鎖的な教団仏教に対するアンチでございます。お寺の中だけでやっているということに対する私なりの一つの問題提起の形です。こういったことを課題にして、もう一回、

仏教を根本仏教から親鸞聖人までの道をたどっていかうと考えました。それでその時、書いた本が『親鸞の生と死』（法蔵館発行）という本です。学術書ですからなかなか普通の人にお読みいただくのは難しい本ですけど、この問題の考え方の基本になるものをその頃、発表いたしました。それがビハーラ運動のその後の基本的な柱になってきました。そして、こういった問題を考えていく中で、私は、アメリカ留学を考えました。日本の社会状況の十年先がアメリカなのです。アメリカ社会で起こってきている問題が、十年後に日本で起きるのです。ちょうど私が三十九歳の時に、十カ月間、アメリカのカリフォルニア州立大学ヘリサーチのために行きました。アメリカでは、デス・エデュケーション (death education) とか、或いは、デス・スタディ (death study) という学問ができておりました。

デス・エデュケーション　いのちの教育

デス・スタディ　死生学

デス・エデュケーション (death education) これをアルフォンス・デーケンさんは、「死への準備教育」と訳したのですが、私はそういう訳はおかしいと。「いのちの教育」と訳しました。デス・スタディ (death study) 死の研究ですが「死生学」と訳しました。こういうことを、カ

ルフォルニア州立大学の方へ行つて、さらにそこから全米の色々なところへリサーチに行きました。そうして帰ってきて、『仏教とビハーラ運動』（法蔵館発行）という本に書きました。今ほとんどの大学で死生学という講座を設けております。或いは、「いのちの教育」というのも、これも一般に通じる言葉になつてきております。しかし、そういった教育なり、学術なり、或いは、宗教の活動の中でムーブメント、運動として起こしていきました。ビハーラ運動、死そして生を考える研究会、死と生を仏教の立場で問いかけるような活動を全国的に始めていったのです。

■ビハーラ医療団

そうして、僕が四十二歳の時に父が住職を代わるといふものですから、それまで、全国津々浦々にこういったことを推進する運動を広めていきました。こういう活動をする中で、仏教を勉強しているたくさんのお医者さんに出会いました。僕は本当に驚きました。名古屋大学医学部の生命倫理審査委員や関係の委員をしていました。再生医療の審査委員、ゲノムとかバイオの生命倫理、医師が新しい治療方法を開発しても、それをやっていいかどうかは別問題です。めったやたらにやられては困るわけです。たとえば、遺伝治療でも遺伝子切り取ってきて繋いで新しい種をつくってしまったらとんでもないことです。或いは、生殖補助医療でも受精卵の遺伝子を操作して変なものをつくっては困るわけです。そうすると新しい治療方法をしていいかどうかを別のところ

で審査しなくてはならない。それが生命倫理審査委員会です。かつて、臓器移植が問題になった時以前は当初はお医者さんだけでやっていました。ところがお医者さんだけでは考えが偏ってしまふ。そこで法学の先生とか、私のように哲学宗教系の者などが入らなくてはならないことになったのです。今では大学病院、或いは、医学部の倫理審査委員会は半数以上が医者でないものが加わって審議いたします。私はそういうことで医療との関わりを持ち始めました。私は同朋大学の教員ですから、仏教に関心を持っていてるドクターが声をかけてくれるのです。お話を聞いていたら、ものすごく仏教を勉強している人たちがいました。たまたまですけれどNHKのEテレの「心の時代」で生と死について話していたら、田畑正久先生（当寺、九州の中津の病院の院長をされ、その後、東国東地域国保総合病院の院長）から、一度病院の方に来てお話をしたいとか、医学会でそういうことを話して欲しいとおっしゃってこられました。それで、田畑先生とも三十年來のお付き合いなのです。そうしますと医療界の方でどんどん仏教、特に親鸞聖人のお話を聞いているドクターが寄ってきてくれるのです。そのうち志慶眞先生も加わってくださいました。私たちが医療の世界に入ってこうしたビハーラをしようとしても、宗教ですから病院の中に宗教はなかなか入りにくいのです。それは誤解されますから。宗教の草刈場にされるのではないかと。あるいは公正を保たねばならないと。アメリカと日本の大きな考え方の違いは「公」という考え方が違うのです。アメリカの病院はどこへ行ってもチャペルがあります。チャプレンが

います。たとえば、アメリカの連邦政府の予算でやっている国立病院でありまして、チャペルはありますし、チャプレンと云ってシスターとか、牧師さんで心のケアする人がおります。僕がアメリカの大学ヘリサーチに行つて、仏教の患者さんがいたらどうするのですかと云つたら、仏教の患者さんがいたら、希望があれば、東本願寺のロサンゼルス別院とかシカゴの仏教会とかに繋がりますとおっしゃつておりました。だから個人の信仰の自由をアメリカは尊重しておりますから、病院から強制するわけではなく、患者が望むならそういう人に来てもらうような体制をとつておられます。日本の場合はどうかというと、「公」というと宗教そのものも否定している。そこで考えて頂きたいのですが、宗教は悩む人の為にあるのです。お寺や教団の為にあるのではないのです。悩む人の為にあるのです。悩む人が仲間を作りサンガを作つて教団ができるわけです。後から出来るわけです。そのへんの考え方が違いますね。田畑先生は私に似て強引な方ですから、東国東地域国保総合病院の院長をしながら病院の中で仏教の法話会、ビハラの法話会をずっとやっておられました。ということは、院長の感覚に寄るのだと僕は思いました。仏教を学んでくれるお医者さんをどんどん増やせばいいのではないかと。そう思つて一九九八年に私の家の近くの湯の山温泉にみなさん集合して下さいと呼びかけたのです。そして、『ビハラ医療団』を立ち上げました。その時に発起人に田畑先生と岩手県の県立病院の院長をしておりました内田桂太という先生と三人の名前で呼びかけました。当初、二十人位のドクターが集まりました。けれども、

その後二十年近くやってきておりますから、今ではメンバー自体は百人位いるのですが、その内の半数以上はお医者さんです。又、田畑先生や志慶眞先生が入って下さって、自分のお知り合いで仏教に関心を持っている人をどんどん誘ってくれるので、その位になっております。そうすると、そういう形で私は医療の場に仏教を持ち込む。田畑先生や志慶眞先生は医療の世界から仏教に入られました。私は仏教の方から医療に関わってきています。それで両者が一緒に活動できる体制になってきています。

■癌は癌のまま助かる

こういったことをやっていく上です。先ほど云いました生死を越える道、仏教というのはヒューマニズムではございません。生老病死を超えていく道です。そういったことを仏教の中でどのようにして学んでいくか、また仏教のどのような教義的ところに寄りかかっていくのか。もっぱらそういうことを私は中心に考えておりますので、これからそのことをお話しさせて頂きたいと思えます。その前に研究会に参加していた方からのお手紙を紹介してみましよう。

これは北名古屋市にお住いの方で「死そして生を考える研究会」に来られた方からのお手紙です。

私は平成六年、自身癌の手術を受け、その後、父を看取り亡くなった後、老母と二人で生活しておりますが、この十年間、癌の手術後遺症、老人介護の体験から医の問題、癌告知、末期の癌に対する医療のこと、そして、高齢化社会に対応する行政の在り方など、私なりに考えさせられ悩みもしました。そして、父の死をご縁に浄土真宗と巡り合い、以前とは大変比べられないほどの心の落ち着きを得た日々を過ごさせていただいております。死の恐れ、生きていく上での経済的な悩み、人間関係の難しさに悩むことは同じですが、何か、しいて言葉に表せば価値観とでも申しましょうか、価値観が変わることにより苦しい中にもある種の心の安らぎを得させていただけになりました。キリスト教の方では、ホスピスがかなり地についた運動として行われているのを知るにつけましても、日本なら仏教でこうしたことが行われるべきであると思っておりますところ、ビハークという同じような運動があることを知り、大変うれしく思いました。自分自身が間違いだらけな私には、人様の死の問題に心の支えになってあげられるだけの力はございませんけれども、こうした素晴らしい勉強会に許される限り出席させて頂き勉強させて頂きたいと思えます。(以下略)

今のお手紙の中に「人間関係の難しさに悩むことは同じですが何か、しいて言葉に表せば価値

観とでも申しましょうか、価値観が変わることにより苦しい中にもある種の心の安らぎを得させていただけるとなりました。」とあります。命を長い短いという価値観、物差しで測る。どうでしょうか。生はプラス。死はマイナスという価値観でおったらどうでしょうか。死は敗北になります。死は恐怖になります。或いは命は長ければ長いほどいいという価値観になっていたらどうですか。自分の力で命を長くしたり短くしたりできるのですか。できないですよ。長生きほど幸せだ。と云っても思い通りになりません。でも、私たちは結果的に長生きになりましたけれど幸せを感じておられますか。つまり、こういう価値観にありますから苦しみになるのです。仏法に出遇うという事はそういう価値観が破られることなのです。仏法に出遇う事ということは、この私が砕かれていくことですね。私の我執が砕かれていくことです。生はプラス、死はマイナスと誰が決めたのですか。プラスもマイナスも無いではないですか。自然のものでしょう。あるがままでしょう。プラスもマイナスも無いというところに立ったら、長くても良し、短くても良し、プラスもないマイナスも無い。頂いたものを頂いたままにという価値観ではないですか。仏法を学ぶことによつてそういった価値観が転ぜられる。それが宗教の救いなのです。あとで申しますけれども、長生きすることが救いではないですよ。

ちよつと脱線しますが、私の寺は三重県の山の中の寺ですけれど古い寺です。元日の朝七時から修正会、つまり、元日のお勤めがございます。本堂は満堂になります。何で満堂かと云ったら、

僕が一生懸命教化活動をしているから満堂ということではないですよ。近くにお宮さんがあるのです。そちらが、朝六時半から祈祷をするのです。私のお寺は七時から修正会です。祈祷を済ませた人たちが寒いから皆飛び込んで来るのです。それだけの話なのです。それで、ある時、私はお宮さんのお参りついではなく、選んでお寺へ来てほしいと思い、「修正会六時半」と書いて張り紙をしておいたのです。そうしたら、神主さんが同じ村におりますので神主さんが「ご院主さんのところ今年は六時半ですか。ではうちは六時にしますから」と云われました。これではいけないと思って元どおり七時にしました。それで、正月の法話の内容を変えたのです。

「年の初めにお寺にお参りに来られて百円玉ぼんと一枚あげて長生きしますようにとか、お金が儲かりますようにとか、息子に嫁さんが来ますようにとか、色んなことをお祈りしたかも知れないけれど、ここでお祈りして頂いてもちつともご利益がありませんから」と云うと、きよとんとしています。初詣に行った所の住職がここはちつともご利益がないのですから。でも、充分説明してお賽銭をあげてもらわないといけません。本当にご利益がないのにお賽銭だけあげよと云ったって、だめですからね。充分説明をして同意をとった上で、あげて頂かないといけません。だけどその次があるのです。ひよつとしたら違うご利益があるかも知れないと。それは自分の欲望を満たそうと仏さんを利用してあるあなたのおぞましい根性が見えてくるというご利益があるかもしれない。そこまで云っておかないといけません。欲望を祈り、欲望にお

参りしているだけです。そういうあなたのおぞましい根性が見えてくるといってご利益です。でもどうしたらその利益が得られるかと云ったら、命がけで全財産をあげて頂いたら、それでもちつともご利益がなかったということがわかるでしょう。そのことによって本物のお念仏に出遇えるでしょう。まあそういうことです。

浄土真宗という仏教はそんな自分をこちらに置いて、対象化した偶像を祈って、ご利益を祈るものではないのです。そういう宗教ではありません。こちらの価値観が変わることによって事実を事実のままに受け止めていられるようにこちらが変わっていく教えです。だから死んでいくままに助かっていくのです。癌は癌のままに助かっていくのですよ。癌は癌のままに助かっていくとはどういうことかと云ったら、癌は癌でこれでよし。「癌は宝です」と云って亡くなっていた人もいます。つまりそれはこちらが変わっているのです。

■ 仏とは

脱線しますが、皆さん、仏様はいらっしゃると思いますか。仏様がいらっしゃると思う方は手を挙げてください。見たことありますか。無いですね。仏さんは色も無く、形も無いものです。色も無く、形も無いものを有るとか、無いとか云っているものはありますよ。「みほとけはまなこをとじて みなよべば さやかにいます わがまえに」。という仏教讃歌があります。私は

幼いころその歌を聞いて目を閉じていたら何も見えないではないかと思っていました。だけど、今は確実にいるとかいないとか云えるのです。皆さん色や形が無くても有るとか、無いとか云っているものがあるのですよ。たとえば風です。風は色も形も無いです。けれども風が有るとか無いとか云いますよね。見えないけれども有るとか無いとか云ってますでしょう。どうしてか。木がそよそよ揺れるとか、戸がゴトゴト鳴るとか。つまり風のはたらきを通して風の存在に頷いています。仏さんも一緒です。仏さんのはたらきがある。「如来」ですから如から私の所にやってくるのです。方便という形を持って。「智慧の光明 摂取の心光」。はたらきを光に喩えて、智慧とか慈悲のはたらきとなって私たちの所に届いてくるわけです。智慧の光明を感じる人は仏様の存在に頷ける。ところが聞く耳を持たない人には届いてこないのですよ。智慧をいただくから慈悲がいただけるのです。慈悲とは抜苦与楽。苦を抜き楽を与える。智慧をいただくから苦を抜き楽が与えられる慈悲がいただける。「智慧の光明はかりなし」皆さん、ご和讃で謳っているでしょう。

『正信偈』なら、

「普放無量無辺光 無碍無对光炎王 清浄歡喜智慧光

不断難思無称光 超日月光照塵刹」

〔『教行信行 行巻』『聖典』二〇四頁〕

これを十二光というのですよ。阿弥陀様のはたらきを光に喩えている一段があります。だから仏さんは私が信ずるから仏さんがいらっしゃるのです。仏さんがいらっしゃるから、仏さんを信ずるのではないですよ。

我如来ましますがゆえに信ずるにあらず

我信ずるがゆえに如来まします

一般に仏さんがいらっしゃるから信ずるとか信じないとか云うでしょう。たとえば、あそこは靈驗あらたかな仏さんだから信じましょうかと。普通は仏さんを対象化しております。仏さんがいらっしゃるから仏さんを信じる、信じないでおこうと云います。違うのですよ。我信ずるがゆえに如来まします。これは信ずるといふのは聞くと云うことです。「聞信如来弘誓願」です。

「聞信如来弘誓願」

〔『教行信行 行巻』『聖典』二〇五頁〕

「聞信如来弘誓願」。如来の弘誓願を聞信するのです。聞くところに仏さんがいらっしやるのです。来現するのです。如からやってくるのですから、如来。『大無量寿経』に「従如来生 解法如如」（如より来生して法の如如を解り）とあります。

「従如来生 解法如如」

（『仏説無量寿経』『聖典』五四頁）

色もない、形のないものが方便として、つまり、はたらきとして願いとなり、諸仏となり、諸仏を通して私の所に届いてくる。如からやってくる。

法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、ここもおよばれず。ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらわして、方便法身ともうす御すがたをしめして、法蔵比丘となりのたまいて、不可思議の大誓願をおこして、あらわれたまう御かたちをば、世親菩薩は、尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまえり。

（『唯信鈔文意』『聖典』五五四頁）

■ 智慧の光明

智慧の光明、智慧というのは工夫するという知恵ではないですよ。無明である私に、無明であるということをはわからせるはたらきを智慧という。闇を闇とわからせる光、それが智慧です。光があるから闇がわかるのです。闇が自覚できるから光が仰げるのです。自分で自分が闇であるとわからないのですよ。迷っている人は自分が迷っているとわからないですよ。蝉は夏を知らないのですから。「蟪蛄春秋を識らず」と云って『浄土論註』にあります。（『聖典』二七五頁）蝉は夏を知らないのですよ。蝉は夏に一生懸命鳴いているのですが、夏がわかっているかといったらぜんぜん知らないですよ。一年を通して生きていないとそれが夏とはわからないです。闇の中にいるものはそれが闇だとわからないです。智慧に照らされてそれが闇だとわかる。だから聞く耳のある人には届いてくる。聞く耳のない人には届いてこないです。「賢い人」ほど届いてこないです。賢い人にはなぜ届いてこないかといったらバリアを持っているからです。堅いバリアを。「知っている」「わかつている」と賢い人は云うでしょ。「知っている」と云う人は聞く耳を持たないのです。この壁を養老孟子さんが『バカの壁』とおっしゃったのです。

聞く耳を持たないから 如来のはたらきがあっても跳ね返ってきますよ。この壁を親鸞聖人は仏智疑惑と云っています。疑惑というと力んで疑うように思うかもしれないですけど、聞こえ

ないこと、聞かないことを疑惑といふのです。聞く耳がない。「聞不具足」と云います。聞かないし、聞けない。賢い人ほど聞けないのですよ。愚かになりましようよね。私いつも云っているのですが、浄土真宗は関西の言葉で云えばアホになる宗教ですよ。あんまり大きな声で云えないけれど。(笑い) 親鸞聖人は「愚禿親鸞」と名告っています。法然上人は「愚痴の法然房」と名告っています。十悪の法然坊と。良寛さんは「大愚良寛」。比叡山を開いた最澄さんは『入山発願文』の中で、「愚が中の極愚、狂が中の極狂、塵禿の有情、底下の最澄」と云っておられます。だから高僧と云われる人、本物に出遇った人は皆、自分は愚か者、アホやと云っているのです。

唯円房が「踊躍歡喜のころおろそかにそうろう」とこう云った。そうしたら親鸞が「親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり(中略)よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり。よろこぶべきところをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。」(『歎異抄』『聖典』六一九頁)だとおっしゃった。つまり、煩惱があるから往生は一定だと。

煩惱のない人は救う必要がない。救われる必要がないでしょう。煩惱があるから救われるので

す。「アホ」というのは救いの正客ですよ。だから親鸞聖人はアホになりましたよ。だけれど自分が自分でアホだとはわからないです。自分は自分が可愛いですからね。自分で自分の愚かさが見えてこないのです。智慧の光明に照らされて初めて見えてくるのです。非常に面白いことわざがありますね。「隣に蔵が建てばわが内、腹が立つ」と。隣に立派な蔵が建つたと。口では良かったですね、おめでとうございますと云っているのです。腹の中には多かれ少なかれ妬みがあるのです。そういうもの全部ほっか振りして外面ばかり飾って、外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐いているのです。それが私です。我々です。しかし、外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐いているそういう私が見通されてくるのは、如来の智慧をいただくからです。如来の智慧をいただくから愚かであることが見えてくるわけです。そういうはたらき。仏さんのそういうはたらきをいただいている人は、仏さんの存在に頷けるのです。聞く耳を持たない人は、仏さんなんかおるものと云うのです。あんなもの石ころではないかと。鯛の頭だとか云ったわけですから、仏法に出遇う事は、自己に出遇う事で、こちらの価値観が転じられてくることです。そういう救いなのです。

■事例「妹の死から」

もう一つ事例を紹介しましょうか。この方はですね。静岡県の浜松市にお住まいの方で、妹さ

んが癌になられたのです。お姉さんがたまたま違う用事で名古屋に来ておりまして、名古屋の東別院で私どもがビハラのセミナーをやっている時に飛び込んで来られた方から頂いたお手紙なのです。

桜の枝先が真っ直ぐ冬空に伸びている病院坂を通い始めて、花吹雪のトンネルを白い心で通り抜けて、やがて葉桜の緑が日に日に濃くなり、今はぎっしりと空を埋め尽くしております。先日は突然御面会を申し出ましてまことに失礼をいたしました。(中略) 妹ミチコの乳癌の再発が前日わかり、その朝、主治医と押し問答の末、うつろな心で出かけた仕事上の研修会でした。先生たちの研究会があること、そして、浄土真宗の存在に出遇わせて頂きながら、私は一体何をしていたのでしょうか。妹のこれからの病状の細かい筋書きまでも見えて、身も心もメタメタでした。私ども姉妹は、私が三歳八ヶ月、妹が七ヶ月の時に母を結核で亡くしております。母は二十八歳でした。母方の祖母の手で育てられましたが、母の実家がすぐ前の家だったこともあり、父とも一緒というふうでした。二人はいつも底い合い協力しあってまいりました。特に母の臨終の時にミッチちゃんを頼むねと云った母の言葉が、幼い私の胸に刷り込まれて、それから、あの子の母であり、姉であり友でした。幼い日も、青春も、喜びも、悲しみも、そして、互いに結婚してからも、運命共同体の如く、だからあの子の命

を揺るがす病気に対して、治るといふ事なら地の果てまでという気持ちが優位に立ってしまいました。でも、今となってはどうすることもできません。あの子の苦しみを少しでも楽にしたい。それにはまず私が変わらなくてはいけないでしょう。しかし、今から何が出るのか。何とかしてあげたいという気持ちでいっばいです。どうかお力を貸してください。勝手なお願いで申し訳ありませんが何とぞよろしく願います。

こんなお手紙をいただきました。浜松は名古屋から結構遠いです。新幹線で二駅ありますので、それで仏教書の出版社の本を色々ご紹介していました。そのころ私は大学の所用でアメリカの方へ行っておりました、帰ってきましたら、次のような手紙が届いていました。

刈田の株に新しい茎が伸びて、時が常に移っていく様をしみじみと感じさせてくれます。長い海外のお出かけお帰りなさいませ。さぞお疲れのことと思います。先生の渡米間際まで大変、ご心配とお手数をおかけいたしました。看病のかいなく妹は七月二十九日午前零時三十五分お浄土に還って行きました。享年四十六歳七月二十四日に誕生日をすませたばかりの四十六歳でした。先生のお手紙に励まされて、出来る限り私の話を聞き、そして、話してあげることに心掛けました。しかし、急激な病状の悪化で伝えたいこ

との十分の一も話せないで終わりました。ただ、定例研究会のお知らせと一緒に同封していただいた新刊書案内で知った先生の『悲しみからの仏教入門』（法蔵館刊）を直ちに求めてその一冊を妹の夫に渡しておきました。妹の夫もあの本をすっかり受け止めてくれて、妹に機会あるごとに少しずつ読んで話をしてくれました。時々、妹は姉さんと主人は同じことを云うわと云っておりました。先生にお手紙を差し上げてから、六月二十九日浜松医大を退院し、自宅療養に切り替えました。なるべく自然のままにさせてあげたいと思ったし、もう病院で打つ手はありませんと間接的に聞いておりましたので、自宅では何とか自分のことが出来る状態でしたが七月の始め、皆と少しでも長く一緒に居たいという願いで、自分で民間薬を取り寄せ服用しました。副作用で顕著な下痢が続き、動けなくなりました。七月の日すぎより妹の夫が会社を休んで付ききりとなり、姑と私が援助し、特に私は医師との連絡役に飛び回りました。妹は私と二人だけになった時、姉さん死ぬのが怖い、と泣きました。私は父さん母さんのいるお浄土に還るのだから阿弥陀様の世界に行くのだから大丈夫だよと。南無阿弥陀仏を称えていけば大丈夫だよと。父さん母さん守ってくれているよ。姉さんもきつと行くから待っていてね、と共に泣きながらすっかり話して聞かせました。とても辛い時間でした。妹は分かっているよ、分かっているよ、お姉さん。姉さんがきつと来ることを分かっているよ。でも私が出来なかった子供たちへのこと、全部済ませてから来てね。待つて

いるからねと申しました。そして南無阿弥陀仏だね、南無阿弥陀仏だねと何度も云いました。入れ替わり、立ち代わり来る見舞いの方が、頑張れ、頑張れ、子供さんが小さいからと云っている様子を切なく思い、何とかしたいと思っていたところ、妹の夫が先生の『悲しみからの仏教入門』を沢山買ってきて欲しい。身近の人に読んでもらって、頑張れコールではない、支えを妹にしてあげたいと云った時には妹の夫がわかってくれたと心が震えました。直ちに沢山求めて身内の方に配りました。高熱と吐き気、全身の倦怠感と痛みで夜も眠られなくなつた時、本人はホスピス入院を希望しました。聖隷三方原病院のホスピスです。以前、友人のお母さんがとても親切にされて良かったと聞いたから、と。友人には自分で電話をして様子を聞きました。いろいろ聞いた上、友人は一体誰が入院するの。私よ。元気を装って云つたので友達も大変びっくりされました。直ちに手配をして、七月二十一日聖隷三方原病院のホスピスに入院させました。入院してから、直ちにみえたキリスト教の牧師さんに私は浄土真宗を信じています。南無阿弥陀仏を称えて父母の所へ還ります、と、はっきり、キリスト教の話を通りました。主治医にも浄土真宗の話、夫のこと姉の私のことを長々と話したと、後になって聞きました。落ち着きを見せていたのは入院二、三日間だけで、その後、肝性の意識混濁が時々見られるようになり、はっきりしたり、ぼんやりしたりの繰り返しでした。入院後は子供たち二人と妹の夫、義母、舅、私たち二名、その他の人達、毎日六、七名が泊

込みで付き添いました。子供達にも食事の介助、冷却の手伝い、手足をさすったり、吸引を手伝わせたり、最後に上の子にも便器の手伝いをさせました。母の最期をしつかりと受け止めてほしいと願いつつ、七月二十八日夜、余り皆長くなると疲れるからと、一旦全員家に帰り、妹の夫と私が付き添って、あの子のベットを囲んで、主治医と三人であの子の幼いころの話をし、医師と私たちが見届ける中あの子は静かに息を引き取りました。母と二人分にしては短かったけれど幸せだったからまあいいか、私に宛てた手紙の中にそんな一言がありました。私どもはお念仏の存在に気付かせて頂いて、まだいくらか経っておりません。その上どなたからも直接お話を伺ったこともなく、ただ法蔵館へ片っ端から書物を注文しての雑学と独学でした。それも病気の進行に振り回されながらそんな姉が妹へ気遣いながらのちよつと話の繰り返しでは、妹は本当に分かったかどうかと不安です。南無阿弥陀仏を称えて阿弥陀様に護って頂いて父母のいるお浄土へ還る、それが全てでした。何も知らないのです。ただただ深くそう思うだけでした。妹はあれから死ぬのは怖いと一度も言いませんでした。しかし、段々身体がいうことがきかなくなり、身体のことらじゅうが大変で、精一杯いろいろ思う余裕がなくなるのは良くしたものだねという会話をしました。同封させていただきました。コピーは妹の夫が妹に宛てた走り書きです。『悲しみからの仏教入門』に挟んでありました。(省略)

妹は鈴木章子さんや平野恵子さんのような、（鈴木章子さんは北海道の方で、平野恵子さんは高山の方で真宗の教えを聞いて癌を越えていった方）教養もなく真宗に対する心得も学びも全くありません。その上、周りの援助もない状況下でしたので、お念仏の存在に気付いたに過ぎません。しかし、それがあの子の大きな力になったのではないかと思っております。あの子の書いた沢山の手紙の中から最後のメモ書きです。力を振り絞って命がけで書いたと思われる私どもの宝物です。長々の手紙で申し訳ありません。今、私はあの子の死を通して出遇えた真宗の教えを、私がしっかりと学び取っていく出発点にしなければならぬと思っております。それをあの子の夫や子供、私の子供にも伝えていかなければならないと思っております。あの子の死後、周りは私が再起不能の状態になるのではないかと心配していたようですが、この教えに出遇えたことが実は私自身を守ってくれたのだと気づき、そして、あの子のまた会おうねの言葉を何の疑いもなく信じる事が出来る自分になっている驚きを感じています。これから出来る限り研究会に参加させて頂きたいと思っております。

これは、たまたま妹さんが癌で、お姉さんが私どもの研究会にふとしたご縁で参加されて、こういうことをおっしゃっているわけです。仏教の学びで癌が治ることではないのです。癌は癌の

ままでこれで良しと、受け止めていけるような、そういうふうはこちらの思い、価値観が転じられていくことなのです。ではどうしたら私たちの価値観が転じられていくのか。あるいは、親鸞聖人は私たちにどういう世界をお示しくださっているのかということをお話しさせていただきます。

■映画「おくりびと」

宗教の救いとは祈ってそのご利益で奇跡を呼び起こして状況を変えるものではありません。こちらが変わっていくのです。こちらの価値観がひっくり返されていく。引っくり返ったら浄土だったと。こちらの思いが翻されることによって開かれてくる世界があるのです。その我執、これが破れるのは如来のはたらき、法のはたらきです。そういうチャンスにはどこで一番触れ易いのか。これはやっぱり誕生とか、死という問題だと私は思うのです。死という縁起でもない汚らしいと云ってタブー視してきました。死を隠す文化というのがあります。そのことが逆にそういったことを気づく、出遇いのチャンスを失わせてきました。葬儀の後のお骨上げのお勤め（還骨勤行）の後に、「白骨の御文」をあげますが、やはり皆さん「白骨の御文」をお聞きになるとじーんと迫るものがあると思います。

「それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり」

（『御文』五帖目十六通『聖典』八四二頁）

誰しもが身近な人を見送ってそして死を自分事として受け取る。人の死だったらお可哀そうに、お気の毒で済むのです。テレビでどなたか有名な俳優が亡くなったと聞いてどうですか、皆さん。ああそうか、とうとうあの人も亡くなったかと。お気の毒にと思うだけです。ところが身近な人、兄弟とか親とか子供とか身近な人の死であればあるほど、その死は自分事として問いかけられてくる。そのことを問いかけた作品に『おくりびと』という映画がありました。二〇〇九年です。元々、青木新門さんの『納棺夫日記』を本木雅弘さんが読んで映画にしたいという事だったので。シナリオが出来上がって青木さんの所へ送られてきたら、青木新門さんがそれを見て、これは俺が云いたいこととちょっとずれていると。原作者として名前を出すのをお断りと云ったのです。『納棺夫日記』で青木新門さんは就職がなくて葬儀屋さんに勤めて身の上を書いておるのですけれど、三章から出来ていて、真ん中の章はあの人なりの『正信偈』の理解が書いてありました。シナリオではそれをまったくカットしてありました。結果的にはあれは言葉ではなく映像でそのことが表現されたものですから外国の人によくわかったのです。それでアカデミー賞の外国

語部門賞をもらえたのです。映画の方は主人公小林大悟を本木雅弘さん。奥さん小林美香を広末涼子さんが演じておりました。主人公は東京の楽団のチェロの奏者でした。ところが楽団が解散してしまったのです。それで二人は山形県の酒田市へ帰って行き、母親が残してくれた喫茶店を改造して住み着いた。就職を探していたら新聞の折り込みチラシに「旅のお手伝いしませんか」と書いてありました。旅行会社かと思って行ったら山崎務が演じる社長が、旅の字の上に「安らかな」という字を入れて、下に「立ちの」、と入れて「安らかな旅立ちのお手伝いをしませんか」という文章にするのです。葬儀屋さんだったというのです。葬儀屋さんで原作にあるような色々なことが書いてあります。あの映画監督を滝田洋二郎さんがしています。滝田洋二郎さんも青木新門さんと同じ富山の方です。現在の南砺市です。高岡から城端線という電車が走っております。あのあたりというのは浄土真宗の土徳のあるところですよ。富山県南砺市の福光といえば棟方志功が疎開しておったところですよ。彼は青森の出身ですが、そこに疎開していて浄土真宗に出遇っています。東本願寺の枳殻邸に一部屋全部棟方至功の絵の部屋があります。同朋会館にも棟方志功の絵が掛かっております。南砺市の光徳寺などにたくさん絵や版画が残っていますよ。棟方志功の仏教との出遇いは、あそこの土地の人達との出遇いによるのです。また日本民芸運動を起した人に柳宗悦という人がおります。その柳宗悦が城端別院で『美の法門』という美学書を書いているのです。それもその土地の人達との出遇いによって思索を深めているのです。あのあた

りは非常に浄土真宗の盛んな所です。滝田さんにもそういうものがあるのです。私は講演で一度ジョイントした時に彼と話していたら、幼い時に「帰命無量寿如来」と云っておりましたと云われていましたから、お東かお西のどちらかのご門徒のご出身です。滝田洋二郎さんは言葉でなく、映像で仏教の死生観をちゃんと表現してくださったのです。たとえば、ケンタッキーのフライドチキンを葬儀屋の人がクリスマススイブに食べて、その食べがらをバケツにほかしているのですが、その食べがらがスクリーンいっぱいに大写しになっているのです。それとか原作にもあるのですが、けれどウジ虫が光っている。これが命の連鎖を表現しているのです。私たちは他の命をいただくのではなくては命を繋いでいけないのです。死体を食ってウジ虫が命を繋いでいるわけです。命の連鎖ですよ。私たちは本来殺生してはいけないのだけれど、殺生せずに生きていけない。だからそこにいただきますと。痛み的心を持つわけです。だから、無益な殺生にブレーキがかかるのです。そういう仏教の一つの命に対する思いが映像で表現されているのです。それで最後の場面ですけれど、主人公を幼い時に捨てて蒸発したお父さんが亡くなったという知らせが入る。主人公は「俺を捨てていった父親が死んだって誰が行くか」と頑張るのです。行かないのです。ところが広末涼子さん演ずる奥さんが「行かなくてはいけません」と云うし、余貴美子さんが演じる葬儀屋の社員も行かなくてはいけませんと云うのです。それから、山崎務が演じる社長も行かなくてはいけませんと云います。四WDの車のキーをぼんと渡して、お棺一個指さして、「これを持っていけ」と

云うわけです。それで主人公と奥さんが亡くなった父の所へ行ったら、岩手県の小さな漁村の一室に父親の亡骸と段ボールが一個ありました。そこで市役所の人に来て、行き倒れの人だとして、事務的に対応しているのです。そうしたらそこで主人公は「私は納棺師」だと云って湯灌をするわけです。それで映画は終わっているのです。最後のその場面は何をメッセージとして訴えているのか。それは「身近な人の死を通して自分の死を問え」と云っているのです。死を考える。身近な人の死であればあるほど、その死は、より自分事として考えられます。人の死は三人称の死です。自分の死は一人称の死です。自分の死を考えたら皆さん人生観が変わりますよ。人生観、いのち観が変わります。だってそうでしょう。誕生の瞬間から今日まで私はいつ死んでも不思議でなかったのですよ。三つか四つでハシカにでもかかって死んでも不思議でなかったのです。十九や二十歳の時に車の運転を覚えて交通事故で死んでも不思議でなかったのです。アメリカで交通事故で死んでも不思議でなかったのです。その私が今六十五歳ですよ。誕生の瞬間からいつ死んでも不思議でない私が今六十五歳ですよ。皆さんもそうでしょう。いつ死んでも不思議でない。生きているのがいかに不思議か。高僧の言葉に「生は偶然、死は必然」とありますが、その通りです。さらに死を見つめるとこんなこともわかります。僕は頭では来年もある再来年もあると思っています。だけでも事実は「朝には紅顔ありて、夕べには白骨となれる身」（『御文』『聖典』八四二頁）ですよ。一瞬先があるとは限らない。今しかありません。「諸行無常」で

すね。一切は常ではありませんよ。常でないものを常であると私が思っているものだからあてが外れて苦しみになるのです。一切は常ではありません。移り変わります。しかし、私の頭は移り変わらなれないと思つて居るのです。だから、鏡を見てがっかりするのです。私の頭ではいつまでも若いと思つて居るのです。しかし、鏡を見たら白髪が増え髪の色が減つて居るのです。がっかりするのです。こんなはずではなかつたと。頭は若いはずだと思つて居るのです。これを虚妄というのです。思い込みです。身の事実、これは如実です。ありのままです。

鏡をじつと見ていると、もちろん鏡は右と左は反対ですけれども、ああそうか六十五歳にもなれば白髪が出て、皺が出来ても当たり前だとわかるのです。老いて当たり前だったなあと。若いはずだとの思いがあるので老いが引き受けられない。事実を見つめてその虚妄が破られるわけです。老いて当たり前だなあと気が付いて老いが引き受けられるのです。病も一緒です。私の頭では健康が当たり前だと思つております。それなのに私はどうして病気になつて居るのだと苦しむのです。生身の身体ですから健康な時もあるのです。病んであたりまえなのです。完全無欠にどこも悪くない人は誰もいないのです。皆、多かれ、少なかれ病氣を持つて居るので。病んで当たり前です。病んで当たり前といったら皆さんほつとできるでしょ。人が死んでも自分が死なないと我々は思つておりますよ。自分は元氣なつもりでおるのですね。だけど事實は死すべき身です。死すべき身だといふところに立つて、初めて死が受け入れられるわけです。

死に勝つという人がおりますけれど死には勝てません。

■死をみつめたら

死を見つめたら無常ということがわかります。更に死を見つめたら死が思いどおりにならないということがわかります。「上手に死ねますか。」どうですか皆さん。死が思いどおりになりませんか。上手に死ぬ、美しく死ぬ、格好よく死ぬ。上手に死のう、上手に死のうと思ったらこんなところでうろろしていたらだめですよ。皆さん。(笑い) 白い着物を着て綺麗なシーツ敷いてちゃんと布団の上で寝ていないといけませんね。そうしないと布団の上で上手に死ねないですよ。だってこんなところで歩いていたらいつ地震が起きるかわからんし、交通事故にあうかわからんでしょう。だけどいいではないですか。痛い時は痛いと言い、苦しい時には苦しいと言い、どんな死に方してもいいと腹が据わったら一番楽ですよ。だから親鸞聖人は、「臨終の善悪をばもうさず」(『未燈鈔』『聖典』六〇三頁)とおっしゃっておるのです。良し悪しに執らわれているから苦しみになるのです。賢い人は良し悪しに執らわれて自分の力で長くも出来る、短くも出来る、上手に死ねると思っているから苦しむのです。皆さんは思いどおりにさいたま市に生まれてきたのですか。自分は私の力で思いどおりに、さいたま市に生まれてきましたという人は手を挙げてください。(笑い)そんな人誰もいないでしょう。父があり母があり祖父があり祖母があり、

綿々と続くご縁の連続の中で命を頂いたのです。幼稚園や保育園にいく前に親から住所を聞いた
ら、さいたま市だったでしょう。そんなの後からわかったのでしょう。さも自分の命だと我を張
っておるのです。自分の命だと我を張って自分で思いどおりになるとの思いで錯覚しておるでし
よう。

我執。誕生も思いを超えたものです。思いがけず生まれてきたのです。生まれてから今日まで
思いがけないことの連続です。この出遇いだって思いがけない出遇いですよ。ご縁がなければこ
の出遇いだってないわけです。誕生も思いを超えたもの、死も思いを超えたものです。清沢満之
先生が如意、不如意について『有限無限録』で次のように述べています。「如意なるものと不如
意なるものあり。如意なるものは、意見、動作、及び欣厭なり。不如意なるものは、身体、財産、
名誉、及び官爵なり。己の所作に属するものと、否らざるものとなり。如意なるものに対しては、
吾人は自由なり、制限及び妨害を受くることなきなり。不如意なるものに対しては、吾人は微弱
なり、奴隷なり、他の掌中にあるなり。此の区分を誤想するときは、吾人は妨害に遭ひ、悲歎号
泣に陥り、神人を怨謗するに至なり。如意の区分を守るものは、抑圧せらるることなく、妨害を
受くることなく、人を謗らず、天を怨みず、人に傷つけられず、人を傷つけず。天下に怨敵なき
なり。」（『清沢満之全集』二一一〇九頁）如意ということは思い通りになることです。不如意と
は思い通りにならないことです。意見とか動作、発動は思い通りになりますよね如意なるもの。

不如意なるものは、身体、疾病、生死です。この区分を誤想する時、間違える時、つまり思い通りになるものを思い通りにならないと思ったり、思い通りにならないものを思い通りになると思うことが苦しみになるのです。この区分を誤想する時、苦を免れない。だから思い通りにならないものを思い通りにならないことを知っていくことが苦を超えていくことなのです。

ビハーク医療団に面白いドクターがいました、僕が勝手に面白いと云っているのですが。静岡の県立癌センターに相河明規さんというドクターがいて、この人は北海道のお寺さん出身なのです。その方がある時にこんな発表をしておりました。その人は静岡癌センターの緩和ケア病棟、つまり余命六カ月か、三カ月位の人が入ってきて積極治療をしない病棟の医師です。痛みをコントロールして自然な形で死を迎えていくという緩和ケア病棟のドクターです。その人が「高学歴・高収入の人ほど往生際が悪い」とおっしゃるのです。「それに比べて田舎で農業なんかをやっている人は淡々と死を受け入れていく」とおっしゃるのです。わかるでしょ皆さん。高学歴・高収入の人は―それは彼の云い方ですけれど―、知性の勝った人という意味でしょう。病院で診察していると、これだけ医学が発達しているのに俺の病気が治せないのかと医者と看護師をぼろくそに云って亡くなっていくと云うのです。それに比べて農業なんかしている人は思い通りにならないことがあることを肌で知っています。自然相手ですから、水害もあれば台風も来るし、干ばつもあります。思い通りにならないことを肌で知っているわけです。死も思うようにならない

ということを知っているわけです。だから、それを受け入れられるわけです。「賢い人」ほど往
生際が悪いそうです。アホになりましょうね。(笑い)

死を見つめると死が思い通りにならないということが肌でわかってくるのではないですか。思
い通りにしようとする我執が砕かれて来るのです。「仏法は無我にて候」蓮如上人のお言葉です。
その我執に苦しめられているのです。我々の苦は外から攻めて来る苦ではないのですよ。我執が
苦しみをつくつていっているのです。その我執を砕くにはどうしたらいいか。その砕かれるような体験
がたとえば誕生とか死とかということです。思い通りにならないものを見つめることによつて思
い通りにならないものを、思いどおりにならないと知っていくことが我が砕かれていくというこ
とが、それを超えていく道です。こちらが砕かれていくのです。だから死を見つめたところに、
死に応えうるだけの生に出遇えるのです。

■「臨終まつことなし、来迎たのむことなし」

そういう出遇いを死んでからではなく、今しましょうと云うのが親鸞聖人の教えなのです。親
鸞聖人のお手紙『末燈鈔』の第一通に次のようなお言葉があります。

眞実信心の行人は、撰取不捨のゆえに、正定聚のくらいに住す。このゆえに、臨終まつこと

なし、来迎たのむことなし。信心のさだまるとき、往生またさだまるなり。来迎の儀式をまたず。

（『末燈鈔』『聖典』六〇〇頁）

平安時代の浄土教、たとえば、源信僧都の『往生要集』を見ますと、生前に一生懸命善いことをして、徳を積みましよう。そして、積んだ徳の力によって臨終の時に、正念を得て、正念を得るには作法がいます。臨終行儀と云って、「頭北面西右脇にして花を散らし香を炊き」と書いてあります。頭北ですから頭を北向きに面西ですから顔を西に向け右脇、右わき腹を下にして花を散らし香を炊き、そこに三人しか居たらいかんのです。引導を渡す人、それから世話をす人、亡くなっていく人がどういう境地か、話したことを記録する人。そこに葦や胡を食べている人がおつたら鬼神が狂乱すると書いてあります。

仏教では死を看取る施設を無常院とか涅槃堂と云います。お釈迦さまの祇園精舎の西北の角には無常院があったと書いてあります。死を看取る施設があったのです。ビハラの施設があったのです。頭北面西右脇にして花を散らして臨終の行儀を守って死を迎えます。そうすると生前に徳を積んである人の所には聖聚来迎、つまり二十五菩薩と阿弥陀さんがお迎えにやってくるのです。そして死後に極楽浄土に連れて行ってくれるのです。それを行き易くするためには枕辺に阿

弥陀さんを置いてそこから糸を引っ張って死にゆく人に持たせるのです。それを糸引き往生と云います。それが『往生要集』に説かれている平安浄土教の考え方です。今日の浄土宗の鎮西、西山浄土宗は法然門下ですが、その伝統を引継いでいます。臨終来迎を教義の本筋に入れております。死後の往生です。それを云うわけです。けれども親鸞聖人はそれに疑問を持たれました。もちろん法然上人も持たれたと、親鸞聖人は理解しています。どういう疑問かと云いますと第一に、凡夫に生前にそんな徳が積めるのですかということ。生前に徳を積んだ人には臨終に仏さんがお迎えに来てくださり、臨終来迎があると云います。けれども生前に徳が積めますか。凡夫に徳など積みつこないです。だから法然上人も親鸞聖人も称名念佛による凡夫往生を説かれたのです。それから第二に、臨終に正念を得るというけれど、頭北面西右脇にして花を散らし香を炊きながら上手に死ねた人だけ救われるのですかということ。当時も牛にひかれて死んだ人も崖から落ちて死んだ人もいたでしょうけれど、じゃあそういう人は救われますかということ。普遍性を持たないのです。一部の人だけしか救われないのだったらだめではないですか。親鸞聖人はそんなことを云いません。「臨終の善悪をばもうさず」と云いますから。臨終に正念を得るということは言及されません。第三に、死後を実体的に地獄・極楽みにたいにイメージするのですが、死後が「ある」って皆さん信じられますか。また「ない」と云って信じられますか。お釈迦さまはそんなこと云っておりません。「あるかもしれんし、ないかもしれん」とおっしゃっています。

いい加減に皆さん思われるかもしれませんが、思いを超えている世界ですから、こんなちっぽけな頭でわかるはずはありません。仏さんに任せておけばいいでしょう。あるかもしれないし、ないかもしれない。それをあたかも自分で確認できないと歩み出せませんというのはちよつとおかしいです。確認なんかできっこないです。先ほども云いました。誕生も思いを超えたものです。死も思いを超えたものでしょう。日々の営みも思いを超えたものでしょう。思いを超えた大きな、大きなはたらき、不可思議、つまり思議すべからざる思いを超えた大きなはらたきに生かされているのです。

『西遊記』の孫悟空―悟空ですから空を悟ったお猿さんです―が筋斗雲（きんとうん）に乗って、三界を経巡り廻つても、最後は仏さんの大きな手の中だったというわけでしょう。誕生も思いを超えたもの、死も思いを超えたものでしょ。日々の営みも思いを超えたもの。思いを超えた大きな本願のはたらきの中に、つまり絶対無限の妙用に我々は生かされているのです。この手の中にありながら長い命が良くて短い命は駄目だとか、生はプラス、死はマイナスとか勝手な物差しを作って、それを思い通りにしよう、思い通りにしようとして右往左往しているのです。それが我々の苦しみです。ところが絶対無限の大きな世界に気が付いたらこんな物差しどうでもいいと気づけるのです。長いとか短いとか、良いとか悪いとかどうでも良くなっていけます。もともと大きな世界に生かされていたのです。

云っておきますが皆さんは、すでに救われているのですよ。だって「弥陀成仏のこのかたはいまに十劫をへたまえり」と書いてあるでしょ。どう皆さんは読んでいますか。法蔵菩薩は私を救わない限り阿弥陀にならないと云っているわけでしょう。それで本願を起こされているのです。法蔵菩薩は私を救わない限り阿弥陀にならない。ところが法蔵菩薩が阿弥陀になった、つまり成仏して「いまに十劫をへたまえり」と云われています。十劫というのは長い年月です。一劫というのは四十里四方の石があつて百年に一回、天女が降りてきて羽衣でこすつてそれが摩擦で消える年月を一劫というのです。あるいは百里四方の容器があつてそこへ鳥が降りてきて芥子の粒を落として、それで一杯になる年月を一劫という。『智度論』という中に書いてあります。

「十劫」ですからその長い年月の十倍です。法蔵菩薩が阿弥陀になつて十劫をへたまえり。ところが、この私に救われたという実感が無い。何故か。「バカの壁」の中にいるからです。その如来の攝取不捨のはたらきが私を包んでくれているのだけれども、こちらがそれを遮断してしまつて気づいてこないものだから、つまり、仏智疑惑の殻の中にいて救われた実感が無いのです。それで苦しみだ、苦しみだと云っているわけです。だから、先ほど引つくり返したら浄土だつたと云つたのです。価値観を引つくり返したら、ああ元々救われていたのだという気づきです。だから死ということを問うことによつて、まさに今生かされているという不思議さ。あるいは、明日いつてもわからない命だ。今しかないのだ。死を問うことによつて、死が思い通りにならない

のだ。誕生も思い通りにならない。思いを超えた大きな本願のはたらきの中に生かされているのだと気づかされてくるのです。これが仏教本来の立場ですよね。無常というのも、中世の文学作品を読むと、滅びの美学のような美化する無常感もあるのですが、親鸞聖人や蓮如上人のおっしゃる無常は仏教本来の無常ですから。「朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身」だから今「臨終まつことなし、来迎たのむことなし」今ご信心を得ましようよという趣旨です。白骨の御文は。臨終を現在に問い詰めて今、死を問うことによって実体的な見方を離れる。我々は命を長さで測ったり質量で表現します。長い命が良くて短い命がだめだと。そういう量で測ることが苦しみの元になるのです。量で測らないということがどうということかということ「無生」ということです。「無生の生」に目覚めることです。

■無生の生

仏教の悟り、空というのは、生もない死もない無生無死に目覚めていくことなのです。無生とこの世界を曇鸞大師が『浄土論註』で面白い説明をしております。寂静の世界、涅槃の世界が無生の世界です。「無生」を説明するのに二つのことで説明をしています。

「無生の生」

一・虚妄無生

「生死は亀毛のごとし」

〔『浄土論註』「行巻」所引 〔聖典〕一六九頁〕

亀毛とは亀の毛です。亀の毛をご覧になったことありますか。亀に毛は生えないです。けれども、おめでたい掛け軸を見ると、鶴と亀とが書いてあり、亀には毛がふさふさと書いてあるでしょう。あれは毛ではなく藻なのです。長生きのシンボルとして書いてありますから藻なのです。そこで中国に故事があつて本来ないものを勝手に思うことを「亀毛の如し」というのです。本来ないものがあるように思える。生死は亀毛のごとし。生死は本来実体的にはないので、すよ。ところがあるように思っているの、あてが外れて「こんなはずではなかった」、と云わないとならないでしょう。「ある」という虚妄でそれを云っているだけなのです。

二・因縁無生

関係存在

「因縁無生」、全てご縁ですよ。誕生もご縁です。ご縁で思いがけず生まれてきたのです。死

もまたご縁でこの世を去っていくのです。縁起、別の言葉で云えば、関係存在です。関係性で私はこの世にいます。関係性で娑婆に生まれてきたのです。関係性でまた娑婆から去っていくのです。だから実体的な確固たる私があるとかないとかというのではないのです。これが仏教の考え方。だから確固たるものと執られるのが苦しみの原因です。そういうものを全部離れていく。無生無死。生も死もないよと。無生の生に目覚めていくところに安らぎがあるのです。そういう目覚めをしていった時に、何歳であってもこれで良しという世界が開かれるのです。誕生も思いを超えたもの、死も思いを超えたもの、日々の営みも思いを超えたもの、思いを超えた大きな本願の願いの中に生かされていたと気づけるわけです。長くても良し、短くても良し、プラスもないマイナスもない、いただいた命をいただいたままに受け入れられるのです。そこへ物差しを持ってきて執らわれるものだから苦しみになるのです。「人生長きがゆえに尊からず、人生深きがゆえに尊し」(『若きいのちの日記』 大島みち子さんの言葉ですけれど、「深き」と云うと、又、深い浅いで執らわれるのですが、要するにそういうものを離れていく。四十歳は四十歳、六十歳は六十歳、百歳は百歳。頂いたものをいただいたままに、と、受け止めた時にこれで良しという絶対満足の世界があるのです。

本願力にあいぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

(『高僧和讃』『聖典』四九〇頁)

「むなしくすぐる」とは空過です。なぜ空過になるかと云ったら物差しに執らわれているから空過になるのでしょう。私たちは命は長ければ長いほどいいと、長さに執らわれていますね。百まで生きても、私は百五十まで生きるつもりだったので百で死ぬのは不本意だと。二百まで生きても、私は三百まで生きるつもりだったので二百で死ぬのは不本意だと。皆さん笑っていますが、かつて人生五十年と云ったのですよ。今、女性の人は八十六歳でしょう。男性は八十一歳でしょう。それだけ延びましたが満足していませんか。長くても良し、短くても良し。そのこだわりをもっているから空しさが出てくるのです。物差しそのものを離れたら安らげるのです。それを『正信偈』で「悉能摧破有無見」(『教行信行 行巻』『聖典』二〇五頁)。「ことごとく、よく有無の見を摧破せん」。有無の見というのが物差しです。「有無をはなるとのべたまう」。有無をはなるといというのが解脱。縛られた思いから解放されることです。

解脱の光輪きわもなし

光触かぶるものはみな

有無をはなるとのべたまう

平等覚に帰命せよ

（『讚阿弥陀仏偈和讚』『聖典』四七九頁）

■事例「本願の終バスに」

最後にそのことを事例で申し上げてみたいと思います。

かつて、大谷大学に英語の先生で阿部幸子さんという先生がおられました。その後、この方は岡山大学の教授として赴任していったのですが、その直後に大腸癌になりました。その彼女が『生命をみつめる―進行癌の患者として』（探究社刊）という手記を残しております。彼女が岡山大学に行つて癌になりました。

「癌とは私にとって一つの新しい体験である。しばらく平和だった私の人生に激動の時が訪れたのだ。病気を持った自己自身との対決は今まで自分でも気づいていなかった秘められた心の内面を自覚させることになるかもしれないし、人生や死について深く考える時間を恵の

かもしれない。」(中略)

「癌死を望む」

「文字通り生の中に死を見つめながら毎日を送っているわけだ。何故生きながら死を見つめることが絶望に結びつかないのか。その答えは単純明快だ。生の実相とは死があつてこそ生が豊かになるという前提によつて支えられている。生は死の反対概念であつて、同時に反対概念ではない。少々矛盾した表現かもしれないが、常に死を念頭に置きつつ生きることは、真実の生命を生きることになるのである。旅路の果てに死があるのではなく、ここに控えている死が生命の一瞬一瞬を生きようと常に指示し、一体的なダイナミックな躍動的生命を与えてくれる。癌を生きる日々を通じて死は段々親しみ深いものに変えられていく。もう時間が来たよと死に手を取られても、君はずっと私の友達だったねと笑みが返せそうである。そして死を見つめて延命を生きる日々を与えられたために、私には生の本当の意味が分かつたように思われるのだ。すべての難問に自ずと解決が与えられるような心境の日々になれた。」

死を問うたゆえに生の意味がわかつてきたと。癌になったことによつて生の意味がわかつたの

だとおっしゃっているわけです。そして最後に「死を前にして思うこと」と題した文章がありました。これが絶筆です。

「死を前にして思うこと」

「癌になる前は自分の力で生きているのだと自信過剰な私であった。人生の困難に直面しても脱出時を見出すこともできたし、様々な状況に柔軟に対応する能力もあると思っていた。癌に直面した私はそれまでただひたすら己の信じる道を歩き続けてきたが、立ち止まざるを得なかった。まず第一に浮かんだ疑問はこれまでの人生を自分の力だけで生きてきたかという事であった。他力によって生かされてきたのだと。何故いままでこんな単純な真理に目を閉じていたのであるか。気づくのが遅すぎたと思うと同時に、気づかぬまま死ぬより良かった。やつとの思いに終バスに乗車できたのである。」

この人賢い人でしたから何でも自分で出来ると思ってきたのです。ところが癌になったとたんに立ち止まざるを得なかった。その時浮かんだ疑問が「これまでの人生本当に自分だけの力で生きてきたのかどうかという事であった。」ということでした。「他力によって生かされてきたのだと。なぜこんな単純な心理に目を閉じていたのであるか」と。何故気づけなかったかと。賢か

ったからです。我を張っていたからです。ところが、その次がいいですね。「気づくのが遅すぎたと思うと同時に、気付かぬまま死ぬより良かった。やっとの思いに終バスに乗車できたのである」と。本願の終バスに乗車できましたから、六十一歳で亡くなっているのですが、「これでよかった」と受け入れているのです。空しい思いはなかったです。絶対満足です。これでよかつた」と云って六十一歳の命を受け入れていらつしやるのです。癌になったこともご縁だったのです。その死に出会えたがゆえに、これまでの人生を自分の力で本当に生きてきたかどうかと思つたのです。他力によつて生かされていた。仏さまの手の中に生かされてきたのだと、気づかれました。でも考えて見たら単純なことでした。なぜこんな単純なことに今まで気づけなかったか。我が強かったからです。でも「気づかぬまま死ぬより良かった。やっとの思いで終バスに乗車できたのである」と。さあ皆さん、本願の終バスに間に合いますか。宿題を早く解決しないと「こんなはずではなかった」、「こんなはずではなかった」と云つて命を終えていかなければならぬのですよ。もう乗車できているのでしたらいいのですけれど。そういう学びをする所がお寺です。今日は『悲しみからの仏教入門』という事でお話をさせて頂きました。

人生のページ

臨終まつことなし 田代俊孝

—上—



先頃、日本臨床救急医学会は、人生の終末期にあり、「心肺蘇生は望まない」と希望する患者が心肺停止状態だった場合、現場の救急隊員はかかりつけ医の指示があれば、心肺蘇生を中止できるとの見解を示した。また、各地の医療現場では二〇一五年に厚労省が出した「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」に沿って、患者の意思を尊重して延命よりもQOL(クオリティ・オブ・ライフ)生活の質を重視する指針作りがなされている。これまでタブー視されがちだった死について、それを先送りするのでなく、今、「自分の死」について考える必要に迫られてきた。そして、死の苦しみや不安を超え、生活面だけでなく、心の満足感を与える真のQOLを高める学びが望まれる。

死を、今問え

このように「自分の死」を、先送りするのはなく、今、問えと説くものには「白骨の御文」がある。「それ人間の浮生なる相をつらつら観するに……」と云えば、真宗門徒でなくても、一度は聞いたことがあるであろう。室町時代の蓮如(一四一五—一四九九年)の作で、浄土真宗の葬儀の後には必ず拜読される。身近な人を見送った後だけにひときわ心に沁みる文章である。

いのちの「有難さ」知る

その中に「朝に紅顔ありて夕べに白骨となれる身なり」とあり、それだから、臨終のときではなく、平生(今)に「だれの人も後生の一大事に心をかけて阿弥陀に帰せよ」と述べる。つまり、今、極楽往生の一大事に心をかけて念仏して信心をえよと説く。もともと、この考え方は、死の瞬間である臨終に仏のお迎え(来迎)を折り、死後の極楽往生を説く

たしろ・しゅんこう 1952年、滋賀県生まれ。80年大谷大大学院博士後期課程満期退学。カリフォルニア州立大客員研究員などを経て現在、同朋大大学院文学研究科長・教授。名古屋大医学部非常勤講師、同生命倫理審査委員。博士(文学)。行願寺(三重県)住職。著書に「増補親鸞の生と死」「ビハラー往生のすすめ」(法蔵館)「親鸞教学の課題と論究」(方丈堂出版)「安楽死・尊厳死」(丸善出版)など多数。

つも思い通りにならない。思い通りにならないものを思い通りにならないと知っていくことがそれを超える道である。科学の立場でのいのちを對象化し、客観的なモノとして見ていけるいのち観から主観的な見方に変わると人生観が変わる。いのちの長短、死に方の善し悪しにとらわれる限り、欲が無限であり、苦に追いかける。事実を見つめて「我」が砕かれるという無我の体験をすると、そのとらわれから離れ、何歳でもよし、どんな死に方でもよしとあるがままを受け容れられる。これこそ絶対満足であり、真のQOLである。

我々のいのちは、明日ありともわからない。常に「終末期」であるともいえる。身近な人の死を通して「自分の死」を見つめると人生観・いのち観が変わる。誕生の瞬間から今日までいつ死んでも不思議でなかった私が今あるいのちの「有難さ」を思わされる。また、平均寿命が八十歳と聞けば自分もそこまで生きられると思っているが、明日あるともわからないのちど知った時、「今を生きて

も、思いを超えていて、思慮すべからざるものであることが知らされる。思い通りにならないものを思い通りにしようとするから苦しみになる。いつか、がんセンターの緩和科の医師である友人が言っていた。「往々にして高学歴で『賢い人』ほど往生際に悪く、スタッフに当たる。それに比べて農業など自然を相手に生活をしてきた人は淡々と死を受け容れていく」と。水害も干ば

臨牀でのこのように学びや心的体験の活動を私たちがはビハラー(梵語で安らかな場所の意)運動と呼んでいる。しかし、仏教は癒やするための道具ではない。癒やしや安らぎを得ようとして仏教を利用してもそれはならない。つかもつとすればするほどより遠くへ逃げていく。追つことをやめて、仏教を学び、体験すれば結果的に、分別を離れて安らげるのである。仏教は体験するものである。

臨牀でのこのように学びや心的体験の活動を私たちがはビハラー(梵語で安らかな場所の意)運動と呼んでいる。しかし、仏教は癒やするための道具ではない。癒やしや安らぎを得ようとして仏教を利用してもそれはならない。つかもつとすればするほどより遠くへ逃げていく。追つことをやめて、仏教を学び、体験すれば結果的に、分別を離れて安らげるのである。仏教は体験するものである。

人生のページ

臨終まつことなし

田代俊孝

下

蓮如は「極楽の生は無生の生なり」「御一代記聞書」(以下)「観無量寿経」に登場する章提希夫人は、夫が浄土往生するモデルとされているが、その覚りも「無生忍」の忍はさどりの意である。後生の「大事」とは無生忍を得ることである。

ただ今参る浄土

無生とは、虚空という意味であり、生命に対する善し悪しなく、様々なことわれ、分別を離れることである。なぜ長寿がよくて短命がいけないのか。なぜ立派な死がよくて犬死がいけないのか。思い通りにならぬものを思い通りにしようとすればするほど苦しみになる。

と」と。長寿のシンボルとして描かれている亀には毛がふさふさと描かれている。しかし、亀に毛は生えない。長寿の亀には毛が付着して毛のように見える。そこで、中国の故事から、本来、無いものをあるように思うことを亀毛のこととしてこのうのである。命は本来、実体的なモノではない。それをあると思うのは、「有」のとらわれであり、無いという虚無主義は

無生無死に目覚めよ

「無」のとらわれである。有ると思うからあてが外れて苦しみになる。無いと思うと空しくなる。いずれにしても、「有無の邪見」である。

私の「思い」に関係なく、思いを超えたものである。父があり、母があり、連綿と続く縁の連続によって思いがけず、私は誕生したのである。三歳か四歳になって自我意識が芽生えて自分のいのちを言っているにすぎないのである。生まれてから今日までの私の半生を振り返っても同じである。私は、誕生の間から今日まで毎日毎日思いがけないことの連続であった。

二つに「因縁生のゆえにこれ不生なり」という。つまり、誕生も死も縁(縁起)であり、自分の思いとおりにならないのちを美体的なものとして観るから、それを所有化して思い通りになるで思ってしまうのである。思えば、誕生

と説く。道元(一一〇〇一五三年)のいう「無生死」を悟るといふのも同じである。

浄土とは「無生の宝国」「往生礼讚」である。「観無量寿経」の章提希夫人はそれを求め、つかもうとする心が尽き果てた時に、無量寿(阿弥陀)の世界に気づけたという。そして、その救いが阿弥陀の攝取不捨と説かれている。だから、行も善も間に合わない。つまり「非行非善」「歎異抄」である。だから、親鸞は、その目覚めを「臨終待つことなし、来

た。これからも、思いもよらないことばかりであろう。また、死も同じである。私は、思いがけず、このいのちを終えていくのである。一切が縁起の法の中にある。縁起とは、平易にいえば関係存在(二つ)とである。だから、確固たる実体的ないのちではない。すべて虚空であるところなのである。

迎たむむことなし」と表現したのである。かつて、鈴木大拙(一八七〇一八九六六年)が、その念仏詩を読んで、浅原才市(一八五〇一九三三年)を無学ながら高い宗教的境地の妙好人だと評価した。才市は、上述の境地を次のようにいっている。「わたしあせし(死)なずに参る／生きさせて／参る上ぞと(浄土)がなむあみだらう」

「りん十(臨終)まつことなし／いまがりん十／なむあみだらう」
「そごち(才市)は臨終すんで／葬式すんで／なんまんたぶつとこの世にはいる／さいちは阿弥陀なり／阿弥陀はさいちなり」
生きていく今、自分の死を問うことによつて、生も死も無い浄土の生に目覚め、「その心すでに浄土に居る」(「未燈抄」)としているのである。

浄土は死後に行へバラタイスだろうか。そこへ行くためには、平安浄土教で説かれるように無常院で臨終の作法を守り、仏を念じて死んでいかねばならない。そして、そのためには徳や善を積み重ねねばならない。出家者ならともかく、俗に生きる私には到底かなわない。どんな死に方をするかわからない。しかし、それとて無駄ではない。その挑戦と挫折の向こうに、我が崩れて、「頑張る必要のない」あるがままをあるがままに受けとる世界が開かれてくる。心が自然の浄土を遊ぶ境地である。私は、死後ではなく、今、救われた。

同朋大大学院教授

あとがき

本書は二〇一七年十月八日、第二十七回報恩講における田代俊孝先生（同朋大学大学院教授、行願寺住職）のご法話の記録です。

先生は大学のご教授とお寺のご住職としてご活躍されながら、ビハータ医療団の代表を勤められ、真宗が現代と向き合い、尚且つ、医療との関わりを持つ中で聞法し、医療の現実の課題から仏教と医療が互いに生死を超える道を求めていく活動をされておられます。

二〇一八年からは福井県にあります仁愛大学の学長としてご活躍の場を移されましたが、熱心な研究姿勢と先生ご自身の課題を持ってこれからも邁進されることにお変わりはないと存じます。

報恩講にて先生のお話を伺って改めて、死というものをどうとらえていくのか、死を超えていく世界、そして本当に生きるということを積極的に引き受けていける世界、そういうことを聞法を通して学ばさせて頂くこと。又、生死を超える道を一人の中で領かせて頂くということが大事だと感じさせて頂きました。

先生にはお忙しい中、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様
に感謝申し上げます。

合掌

二〇一八年十一月十八日

第二十八回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎

第二十七回 光照寺報恩講 法話

『悲しみからの仏教入門』

田代俊孝先生 講述

2018年（平成30年）11月18日

発行 真宗大谷派 弘興山 光照寺

事務局 〒331-0821

埼玉県さいたま市北区别所町102-2

電話 048-651-2781